

〈花と愛のミステリー〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

この写真がカラーだったら、すぐ連想するでしょう。あ、フェルメールの絵のドレスだ、と。光沢を含んだ鮮やかな青いドレスの少女(実は若妻)の手にするチューリップのオレンジ色が効いている。そう、本作は十七世紀オランダ・アムステルダムで繰り広げられる、花に狂い、愛に狂った「フェルメールの絵画の世界の物語」である。

チューリップといえばオランダ、と簡単にいうけれど、あの花がオリエントのコンスタンチノープル(現トルコ・イスタンブール)からもたらされたのは、十七世紀、スペインから独立、経済的にも繁栄を極めるオランダがまさに「黄金時代」で沸き立っていたころ。とりわけ絵画とチューリップは異常なまでの人気の的で、人々は競って投資や収集に熱を上げた。レンブラントやフェルメールらの画家を輩出し、高貴な珍重花チューリップは、特殊な品種

なら、球根一個で邸宅一軒分の値段で取引された。美と欲望が生み出した驚くべきバブル経済—こうした歴史的背景を踏まえながら、物語は一枚の肖像画の夫婦と若き画家との愛の葛藤を追うダイナミックなヒューマン・サスペンスへと展開する。

一六三四年、海辺の修道院(孤児院)で育ったソフィア(ヴィキヤンデル)が裕福な街の有力者コルネリス(ヴァルツ)の元へ嫁いでくる。コルネリスは若く美しい妻には満足だが、なかなか子に恵まれないのが悩みだ。ある日、当時流行の夫婦の肖像画を描いてもらおうと思いつく。世継ぎの代わりにせめて肖像画に自分の生きた証しを残したい、と。妻は妻で、貧しい孤児の身の上から贅沢な生活に迎え入れてくれた高齢の夫を、愛しているわけではないが、感謝している。それにいつまでも子が生まれないと孤児院に返されてしまうの

では、と焦る。そんな時、若き画家ヤン(デハーン)と出会ったのだ。

鮮やかな青いドレスをまとい階段を下りてきたソフィアに一目で心奪われたヤンの猛アタック。だが、道ならぬ恋の悩みは深い。切羽詰まったソフィアは、出入りの仕立て屋、あいまい医者、訳ありの若い女中らを巻き込んで、大胆不敵な企みを思いつく。山あり谷あり、人情の機微もユーモアも、活劇もありのドキドキサスペンス。

なかでも、痛快(!)なのは修道院長(デンチ)の活躍だ。奥庭にある秘密の花園で禁断の花チューリップを栽培、こっそりと訪れる野心満々の投機家たちを禪問答のような対応であしらう。重いペールの下の鋭いまなざしと短い一言で欲望に狂った男たちの鼻面を振り回す一方、弱い者には救いの道も指し示す。酸いも甘いも知り尽くしたシニア女性の面目躍如。さすが、デイムの称号をもつ英国ベテラン女優の貫禄十分だ。

ベストセラーの映画化だが、女優でもある原作者D・モガーが脚本に参加、虚実絡めたミステリアスな魅力を盛りあげている。死んだふりはあるが、残酷な刺激や恐怖とは無縁の上質な娯楽時代劇。見終わった後味も楽しい。

『チューリップ・フィーバー 肖像画に秘めた愛』

英米合作映画(105分)

監督: ジャスティン・チャドウィック

出演: アリシア・ヴィキャンデル、クリストフ・ヴァルツ、
デイン・デハーン、ジュディ・デンチほか

10月6日より新宿バルト9ほか、全国順次ロードショー

© 2017 TULIP FEVER FILMS LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

